

史料を將來せられ、さうして其のたびごとに此の種の困難を冒すことを厭はれなかつた。蒙文や滿文の蒙古源流の藍寫眞を撮られたこと、清初の多くの史料を抄寫せられたことなど、一々數へ切れぬ程である。宮殿の番人等は古くからの顔馴染で内藤大人と呼び馴れ、今度は何を寫すのかなど、問ふて好意を示して居つた。かゝる活動は獨り清朝史に格段の熱心を有して居られたが爲ばかりではない。朝鮮に行けば朝鮮の史料、西洋に行けば英・佛・獨に存する敦煌、西域の史料、さては太平天國關係の文書の採訪といふ風に、凡そ一旅行から歸られた時には、必ず貴重な史料が新たに將來されるのが常であり、従つてその旅行にはこれが爲の活動が付きものであつたと思はれる。旅行に於てかゝる有様であつた博士であるから、平生もこの事業の爲に拂はれた努力と犠牲との多かつたことはいふまでもない。明治四十年那珂博士に依つて譯出せられた蒙文元朝祕史の原本の傳來も、博士の多年の搜求の熱心に歸すべきであり、老大な明實錄の内閣本を悉く抄寫させて、我が大學に備へられたのも博士の功である。我が東洋史研究室が今日貴重なる書籍史料の多くを包藏し、學徒の研究に資し得るのは、博士の盡力に歸すべきものが甚だ多い。東洋史教室の書籍購入費が、常にバランスの上に赤字を示して、他の教室に迷惑をかけたのはこの爲で、一方甚だ申譯ない事であつたにしても、他方これによつて今日に存する蒐集を見ることが出来たとすれば、功は罪を償ふて餘りありといはねばならぬ。それにしても金で買ひ得る圖書の蒐集の如きは、必ずしも博士に待たねばならぬことではない。たゞ上に述べた如き金錢の範圍外に屬する史料の蒐集は、獨り博士の苦心と勵精とによりてのみ成され得たことで、今日坐らにしてこれ等の貴重なる材料に親しみ得る人は、深き感謝を博士に捧げなければならぬ。近時これ等の蒐集を利用する學徒が漸く多きを加へて來た有様は、必ず博士在天の靈の莞爾として見そ